

時間数が少ないなかでの指導

日々、子どもたちを教える先生方が抱えるお悩みの中から一つを取り上げ、解決のためのアドバイスを掲載する新コーナーです。
今回は、田中洋一先生と安田恭子先生にご登場いただきます。

お悩み

教科書で想定している教材の配当時数が全体的に少なくなり、時間内に学習しきれないことがあります。どのような考え方で、どのように指導していくのがよいのでしょうか。



一つ一つの教材にかけられる時数が少ない、つまり、教科書全体の教材数が多いことにはどのような意味があるのでしょうか。まずは、指導の際の考え方についてお答えいただきたいと思います。



東京女子体育大学理事・教授
田中洋一

解決のために

1 指導事項を絞り、多様な教材に出会わせる

私たちは日常生活でどのように文章を読んでいるのでしょうか。例えば電気製品を買ってきて説明書を読む場合は、説明書の目次や索引を使って、必要な情報を探します。また、環境問題について知りたいから本を読むような場合は、ざっと全体を読んでおいて大切そうところを見つけて、詳しく読むようなこともします。文学の読み方ももっと多様です。ストーリーを楽しむだけでなく、登場人物に自分を重ね合わせたり、描写を味わったりしますが、これも一回の読書ですべてを味わうのではなく、本の内容やそのときの気分に応じて楽しみ方を選んでいるのです。

文末表現などに着目して筆者の主張や結論を理解します。文学的な文章でも、第一場面から詳細に読み、展開、心情描写などのすべてを読み取らせようとするのが主流です。そのため一つの教材(単元)に多くの時間を割くことになり、その結果、国語の時間は多くの児童に退屈な時間、分かり切ったことを繰り返している時間と捉えられています。

業なのです。授業では、まず教えるべき事項を決めて、そのために教材を活用することが大切です。つまり、単元での指導事項を絞って指導するのです。そうすることによって、児童は国語の授業で何を教わっているのかが分かりやすくなり、いろいろな読み方の特徴を理解できます。そうすると必然的に指導時間は少なくなるのです。また、短い時間で単元が終われば、結果として、一年間に多くの文章と出会えることにもなります。

一つの文章を繰り返し読ませて詳細に読み取ることが悪いわけではありませんが、国語の時間がいつもそのような展開では、育つ力も限定的になりますし、児童は授業に飽きてしまいます。国語の授業では、目的や状況に応じた読み方が工夫できるように子どもたちを育てたいものです。

このように、日常生活では目的や時間、状況などに応じて多様な読み方を行っているのですが、国語の授業で行われる「読むこと」は、かなり固定化されています。説明的な文章では、第一段落から順に読み、指示語や接続語、

文章の内容を読む力は、一語一語に即して詳しく読み取る力だけではありません。一読して要点を捉えたり、自分の探している情報を短時間で見つけたりする力も大切なのです。また、書かれている事柄について自分の意見をもつ力も必要です。これらの力の育成のためには、授業でも多様な読み方が行われる必要があります。

まず、一つの教材で教えられることをすべて教えようとするのはやめましょう。それは教材に振り回された授

田中洋一

東京都生まれ。東京都の公立中学校教諭。教育委員会指導室長等を経て現職。中央教育審議会国語専門委員、学習指導要領中学校国語作成協力者などを歴任する。著書に「小学校国語指導の基礎・基本」「観念別学習状況の評価規準と判定基準」「図書文化社」などがある。

1 時間が少ないなかでの指導

安田 恭子

福島県生まれ。新宿区立津久戸小学校教諭をスタートに、西東京市・中野区を経て、新宿区立西戸山小学校で定年退職を迎える。
日本国語教師の会、櫻の会会員。共著に、「小学校国語科学習指導の研究 シリーズ」(東洋館出版社)などがある。



今度は、個々の教材の指導計画という視点から、どのような工夫が考えられるかをお答えいただきます。



元新宿区立西戸山小学校教諭
安田 恭子

解決
のために

2 「これだけは欠かせない」という学習を見極める

「この教材文の配当時間、五時間になっっているけれど、時間内に指導しきれぬかしら。」

「ええっ、今度はたったの四時間。こんなに長い作品なのに無理だよ。」

教科書の教材について、学習の手引き等に忠実に指導をしようとするばかりで、指導時間が不足するという訴えの声を多く耳にします。限られた時間の中で、どのような指導をすればよいのでしよう。具体的な「読むこと」教材を取り上げて、考えてみましょう。

五年	筆者の考えをとらえ、自分の考えを発表しよう
「見立てる」	読む 6
「生き物は円柱形」	書く 1
配当時間	

本単元の学習内容は、大きく次の二点といえます。

- (1) 筆者の考えを捉える。
- (2) 筆者の考えについて自分の考えをもち、発表する。

学習の進め方としては、まず、欄外の問いを手がかりにしながら、短い第一教材「見立てる」を使って、筆者の論の展開のしかた(構成・例の取り上げ方・キーワード等)と、筆者の考えを把握することを、1〜2時間で学び

ます。第二教材「生き物は円柱形」では、第一教材での学習を土台とし、学習の手引きを参考に、

- ① 共感・納得、疑問を明確にする。
- ② 文章の構成を捉える。
- ③ 筆者の考え、論の進め方を、要旨としてまとめる。
- ④ 筆者の考えについて、自分はどう考えるのかをまとめて発表し合う。

という学習を、五〜六時間で進めることとなります。

ここで、計画どおりに学習を進められるか、変更をしなければならぬかは、指導者が目の前の児童の実態をどう把握し、身につけさせたい力をどう見極めるかによるところが大きいとい

えるでしょう。この二点を的確に見抜くことで、省くことと省けないことが明確になるのです。

要約の学習経験が少ないので、要約力をつけたいとき

このとき、学習の手引きにある「この文章の要旨を百五十文字以内でまとめよう。」という学習は外せません。しかし、「百五十文字」という枠は、実態や学習経験から「二百文字以内」や「百八十文字を目安に」に変更できるでしょう。さらに、要約の前提として、文章の簡単な構成を「始まり・中の前半・中の後半・まとめ」の四つに分けて押さえ、それぞれの内容を短くまとめる学習(②)も欠かせないでしょう。つまり、これ以外の①・④は省き、②・③に力を注げば、指導時間も保証されたいといえます。

自分の考えを伝えること、自分の考えをもつことと自体が苦手な児童が多く見られるとき

この場合、いちばん大切にしたい学習が、作品を読んで感じたことを、共感・納得と疑問という二つの視点でまとめること(①)です。もし、自分の考えをもつという学習経験がきわめて貧困な実態ならば、その第一歩となるこの学習だけに力を入れ、文章の一文一文に共感や疑問のマークを付けるといった学習を取り入れることが考えられます。もちろん、このとき、②や③の指導は省きます。④についても、文章全体についてではなく、「始まり」の部分のみについての自分の考えの発表としてもよいでしょう。

この補完のためにも、教師は、年間指導計画をつねに念頭に置き、どの教材でどの活動をプラスしていくかの見通しをもたなくてはなりません。例えば、前述したように、「要旨を捉えること」に重点を置いて「自分の考えをもち、発表すること」を省いた場合には、後の教材「ゆるやかにつながるインターネット」で、自分の考えを書きまとめ、発表する活動をしてから、友達との話し合いに臨むという学習計画を立てること等が考えられるでしょう。教師は、いつも目の前の児童をしかりと見詰め、柔軟に指導をしていきたいものです。